関門時代の初期（1）（金子三次郎の回顧録「随心録」より）

明治四十二年春、小生数へ年 17 才頃で神戸の（鈴木商店）本店から門司支店へ転勤する。
小生の（鈴木商店）名古屋時代の親方の福永次郎さんが首脳者として着任しておられた。

小生は各部の下働きで、砂糖や小麦などの販売の記帳などのお手伝ひだった。
当時の門司支店は桟橋通の表通りに面し、真向いには古賀文旅館があり、すじ向ひには一流旅館の「川卯」があった。川卯の本店は下関の駅前にあった。

関門時代の初期（2）

桟橋通の門司駅前には三井物産の門司支店が洋館の赤レンガで、立派な建物だった。
暫くすると福永さんは（鈴木商店の）本店へ移られて、このあとに井原伍兵衛さんが支店長として着任せられた。

井原さんも数年で本店に移られて、その後任に西岡貞太郎さんが着任せられた。この西岡さんとその後色交流が出来て一番長く指導にあづかり、又一方ならぬ御世話になった。

関門時代の初期（3）

西岡さんも門司支店長から下関支店長など関門間で永く勤められ、遂に下関支店を最後の勤務場所として六十何才迄つとめ上げて、ここで引退せられて土佐の高知へ移り新居を構へ、ゆうゆう自適の生活に入られ、高知で逝去せられた。葬式には小生も高知迄馳せ参じました。
※西岡貞太郎の出生地は高知県安芸郡安田町で、西岡は鈴木商店土佐派の最長老格

関門時代の初期（4）

小生の門司支店時代ハ吾々小僧クラスのものは和服だった。
洋服を着た時ハ黒の詰襟であった。
セビロを着るようになったのは矢張り二十才近い年になっておった。

門司支店の店員は凡(すべ)てが大里(だいり)から毎日汽車で通勤した。
大里の日糖工場の近くに独身者用の合宿所があって、ここから毎朝大里駅に出て八時頃の列車

で門司へ通勤するのである。今の九軌（九州電気軌道株式会社）の電車（路面電車）はその頃開通しておらなかったから、汽車に乗り遅れたものは次の列車との時間の間が非常に永いから、大里から門司迄テクテク徒歩であるいて出勤した。社員のうちには運動の為にわざと徒歩で通勤したものもあった。

夕方には又汽車で大里迄帰る。
めしは朝、晩、ひるとも門司支店の食堂でたべる。
大里は全く寝るだけに帰るわけである。
大里には何の「ゴラク」もないから、門司で芝居をみたり、映画をみたりして終列車に遅れると、皆んな鉄道をテクテクあるいて帰ったものである。この道は当時非常に家も少なく、野道でまっくらやみであるから、提灯（ちょうちん）をつけて通らねば方向がわからぬようになって歩けない。

関門時代の初期（5）

当時、大里の合宿所には上村政吉氏や竹村房吉、三木醇三氏など、後日有力なる社員となった人々が独身で起居しておった。後期に弘瀬彦猪氏や戸坂隆吉氏なども一緒におった。

私は当時同僚の村上重章、武藤競、千北松吉などと共に起居して、朝は大里の佛願寺の和尚に論語や文学規範などをおそわった。英語は月、水、金に菊池武信氏（クリスチャンで有名な英文学者だった）にナショナルリーダーを教わった。

英語は菊池さんのあと、渡辺氏、浦和氏などに大正四年の大里製粉所が大火を起す迄引つづき怠ることなく続けて習った。

こ合宿所の番人は田渕と云ふ夫婦ものだった。おやじは多分大工だったと思ふ。
合宿所のとなりは宮本政次郎氏の住宅で、そのとなりが支店長の井原伍兵衛氏の宅であった。
この井原氏の奥さんが、柳田富士松さんの奥さんの姉妹だった思われる。

宮本さんは奥さんは東京におられて、一人で年波のお婆さんと二人で暮らしておったので、門司や下関で壮んに美女をよんで遊んでおられた。これが、菊地氏や井原さんが気にいらないと云って、最後に神戸の本店迄ご注進（ちゅうしん）が飛んで、ひとさわぎが起った。

私の門司時代、岡烈さんが一寸（ちょっと）門司におられたことがあったが、東京へ転じられた。
続いて、金光庸夫さんも一時門司支店に居られたが、これも一年位で東京へ移られた。
金光さんは、当時門司支店の二階でしばらく暮らしておられて、よく雑談をした。奥さんは二日市（福岡県筑紫野市の“二日市”のことか）におられた。

（昭和 39.6.11 記）